

# ネットはスズランテープ。

望月宏一

人間で言えば、ようやく大人の仲間入り！と多くの人が口にする事だろう。『ようやく』と言うように、20年という年月はとてつもなく長い。赤子が成人になるのだから長い。気がついたら、20年・・・経ったんだなあ、という印象だ。県内屈指の強豪校となって、西武台千葉高校の名前を県下に轟かすようになったが、その歴史は一日の積み重ねによるものだ。

西武台千葉高校の前身は武陽学園高校という男子校。周知の事実であると思われるが、猿からハイハイ、そして洋服では知らない人の方が多くなっているかも知れない。学園がスタートして間もなくの頃、ある二人の生徒が、その時担任だった千葉先生に『バドミントン部に入部したい』と申し出た。(私は千葉先生の副担任でした)既にスタートしていたクラブがいくつかありましたが、実はまだバドミントン部は存在していませんでした。しかし、申し出た生徒が学園の入学案内にバドミントン部と明記してある、ということで急遽顧問が決まり部活発足となりました。申し出た生徒が千葉先生のクラスの生徒ということもあり、初代顧問は(前に餅つき大会だったか、卒業生を送る会だったかの余興のクイズで問題となる)千葉先生となった訳です。しかし、1年目とはいえ、進路のことなど学校の基礎を作っていかなければならない重要な仕事が多く、なかなか現場に出られないだろう、ということもあって当時千葉先生の副担任だった私が副顧問としてバドミントン部の現場に出ることとなり、今日にいたっています。

生徒はほぼ経験者で、早速ブロックの大会に出場できるということもあり練習が開始された。生徒は経験者だが私の方はど素人。(今でも変わらずど素人)シャトルがどのくらいするものなのかも知らず、気軽に購入して1ダースをボンと渡すと僅か30分もしないうちに、コートの上屑となってしまった。そのショックが大きかったことを今でも鮮明に覚えている。だから試合の直前までビニールシャトルを使用。そしてネットもなかったもので、すぐに取りそろえてもらったが、2面分のみ。ないよりはいいが届くまでの間、ネットの代用をスズランテープで張り、網の部分をやはりスズランテープを片腕分ぐらいの長さに切って、鯉のぼりの吹き流しのようにたくさんたらしめてネットがわりにしたものだ。ブロック大会当日。当時14ブロックは圧倒的に野田北高校(現在の野田中央高校)が県大会の出場枠をすべて抑えていた。そこへ名も知らぬ新参高校の出現。3位までが県

大会に出場できる、ということもあり3位決定戦で武陽学園の二人(ダブルス)が残った。相手はもちろん野田北高校。一進一退の攻防。新参者には負けられないというプライドもある。はたして、流山の市民体育館の応援は白熱していた。野田北高校 VS 武陽学園を含む他校全部。みんな同じ気持ちだったんだなあ。新参校である学校にもかかわらず、他校の後押しもあり、初のブロック大会は、入賞となり県大会出場となった。

西武台千葉高校が初めて県大会に出場するのを決めたクラブは、バドミントン部であったということを知っている人ははたして、どのくらいいるだろうか。こうして歴史は積み重ねられていったのである。先日、戸邊先生に貸すものがあって学校へ持ってきた。すると『これレアものですね!』というので何かなと思ったら、入れてきた袋が、バドミントン部が初めてインターハイに出場したときの記念参加賞品が入っていた袋でした。『栃木』と書いてあり、その刹那小倉君が両手足を攀らせながらも戦い抜き、全国大会への切符を手に入れたシーンがよみがえって、ここでも歴史を感じずにはいられませんでした。そういえば、その時の記念Tシャツ。たしか7色購入して、つい2・3年前まで着ていた気がする。

2年目、埼玉県の西武台高校から高瀬先生が赴任してきて、本当の意味でのバドミントン部の歴史が始まったのは言うまでもない。

---

## 「ぼくがここに」

戸邊尚彰(8期生:西武台千葉高校教)

卒業してからもう11年。そこで、少しむかしばなしをしようと思います。

むかしむかし、ある小さな町にバドミントン部がありました。バドミントン部員は、毎日体育館を使うことはできないので、月曜日は清水公園の体育館へ練習に、水曜日は外をさまよい、夜は岩名ジュニアの手伝いに。そして、金曜日は松戸の六実中へしごかれに行きました。学校での練習はコートが4面。初心者などは体育館のステージで練習しました。カーテンにシャトルを打ちつけていけば、穴が空き怒られる始末。試合に行けば、ブロック大会から必死の思い。食堂の前には芝生があり、絶好のトレーニング会場となっていました。今では、第2体育館ができ、練習会場は上空10メートルへと移動しました。その他にも、ラケットをマイクに持ち替えての秘密練習や、緊急夜間桜の下練習と称して、花見もしました。そうそう、もうひとつ忘れてはいけないのが、野田橋クラブの存在。野田橋周辺に住んでいる者からな

る怪しいチャリンコ集団。毎年恒例、松伏の盆踊りには必ず参加。踊って歌って大盛り上がり。また、誰もいない夜に、松伏中に潜入し秘密練習もやりました。

さて、この当時、大変だったことは、やはりシャトルではなかろうか。まじめにやっているときに、高瀬先生に言っていた「使っていいぞ」の言葉に、どんなに感激したことか。シャトルに困り、無印のシャトルにヨネックスのシャトルのシールを貼り付けるなんて事もしたような気がします。七夕のときには、フリーマーケットで大きな声で人を呼んだり、カプトムシを売ったりもしました。この当時のシャトル代のことは、今でもよく分からないので大きな事は言えませんが、大変だったのは間違いないと思います。そんな中での出来事を一つ紹介します。今でもあこがれているシーンです。それは餅つき大会のことでした。むかしは餅つき大会になるとかわいい女子選手が箱を持って、先輩たちの所へ行きました。それはシャトル代の寄付をもらうためです。と、そのとき、とある先輩が財布を開けると1万円札が1枚しか入っていませんでした。その先輩は、考えた末に思い切りよくその1万円札を箱へと入れてしまいました。こんな先輩の姿にあこがれたものです。私も卒業したらこの箱に気前良くお金を入れてやると。

(言葉足らずでこのシーンがはっきり伝えられないのが残念です。) そういえば、むかし高瀬先生の家にあった、からくりつきの貯金箱は、いまは何処へといったのやら。しょっちゅう遊びに行き、この貯金箱を見るたびに、「いつぞやはここにお金を」と思い、500円玉を入れた記憶があります。

げんざいげんざい、千葉県野田市にバドミントン部があります。体育館はほぼ毎日使え、シャトルはほぼ思うように使えます。むかしもげんざいも大変な思いをしているのは変わりませんが。

(注：皮肉を言っているわけではありません。) これをどのように考えるか。こんなにうれしいことはないと思います。むかしむかしから望んでいたことです。バドミントン部に関係した人達が、われわれにより良い練習ができるようにと努力したのです。多くの人たちの協力があつたということ、決して忘れてはならないと思います。最近このようなむかしばなしが語られることが減りました。先輩や後輩たちにむかしむかしの話を聞いてみたいものです。

「いまの生活と50年前の生活を比較すると、どれほど異なっているだろうか。衣食住のすべてにおいて、かつては考えられないほど豊かさや便利さを経験しているのではなかろうか。そして、ここが大切なところだが、現代人は過去の人々に

比べて、きわめて「幸福」になっただろうか。確かに便利で快適な生活はしているが、わが身の不幸を嘆いている人も実に多いのである。」ある本からの一文です。この言葉を、この20年間のバドミントン部に当てはめたとしたらどうだろう。

シャトルやコートは「輝き」を失ってはいないか。大切な「心」は、深く暗く沈んではいないか。

この記念すべき年にあつた、「心」に残るうれしい出来事を3つ紹介します。1つは、娘が誕生したこと。この感動は忘れることはないだろう。次に、餅つき大会でのこと。手作りの手提げ袋をもらいました。使えずに飾ってあります。最後に、この“私”に大会の結果を報告しにきてくれたこと。一瞬の出来事でした。「三冠とりました。」どんな言葉よりもこの一言に勝るものはないと思います。このとき、「ああ、もうかなわないな」と感じました。

結びに、まどみちおさんの詩集から「ぼくがここに」を紹介します。まどみちおさんは“ぞうさん”「ぞうさん、ぞうさん、おはながながいのね♪」の詩を作った人です。

ぼくがここに

ぼくが ここに いるとき  
ほかの どんなものも  
ぼくに かきなつて  
ここに いることは できない

もしも ソウが ここに いるならば  
そのソウだけ  
マメが いるならば  
その一つぶの マメだけ  
しか ここに いることは できない

ああ このちきゅうの うえでは  
こんなに だいじに  
まもられているのだ  
どんなものが どんなどころに  
いるときにも

その「いること」こそが  
なににも まして  
すばらしいこと として

20周年という記念すべき時に、すばらしい選手たちとともに、ここに「いること」ができ、本当にうれしく思います。

## 空に太陽がある限り

高瀬麻美

一昨年、大会で徳島に行きました。帰りの飛行機の時間まで空気があったので鳴門海峡を観光しました。乗船代がもったいないとの声が上がりましたが、せっかく来たのだからと渦潮を見学する観光船に飛び乗りました。強い本流に脇の海流が引き込まれ渦ができては数秒で消え、またできては消えていきます。列島、海流、海底、そして太陽と月の引力が絡み合い渦を作るという地球の不思議を堪能しました。次々とわき起こる渦を船室からぼんやりと眺めながら、昔 CM で見た「うずしお」という洗濯機や、ラーメンの“なると”に思いをはせました。高校生達はデッキで黄色い声を上げ、渦の中心からターボーがシンクロで出てくるかもなんて冗談を飛ばしていました。船頭は水の流れて大きな渦ができる場所がわかるようで、船を近くまで寄せ観光客を楽しませます。大きなものは直径 20 メートルにもなり客船をも回すそうですが、この日は潮の関係で大物はありませんでした。

1987 年 4 月 29 日に湯島天神で結婚式を挙げました。私にとってはこの日から始まった 20 年でもあります。バドミントン部に組み込まれないように抵抗した時代もありましたが、この流れに乗るのが私の宿命と見定め、楽しみを見つけながらつかず離れず生活し今に至ります。土地探しをしていた時のこと、2 面程度の体育館を造りそのフロアの一角に住居と教室を設け、練習見ながら生活を送るようなライフスタイルを計画しました。何件か不動産を巡りましたが、ふさわしい土地が見つからないままこの夢は実現しませんでした。しかしこんな馬鹿げたことを当時は真剣に考えていたことが不思議です。あの時不動産屋に「夢があつていいですね」とつぶやかれたのが今となってはしみじみきます。生活を全て部活に巻き込むなんて無謀なことしなくて良かった、と今は安堵していますが、その後の幸運は西武台に第二体育館ができたことです。自分で作らなくても家の至近距離に練習場所があるというスタイルは実現しています。

「強く願い続ければ叶う」、これが私のモットーですが、永く願い続けることが肝心です。20 年前、だれが野田でインターハイが行われ、それに揃いの T シャツ着て応援する日が来ることを想像したでしょうか。でもその日その日を懸命に過ごしていたら、夢が現実になったことを皆で体験しましたよね。だから本気で思いましよう。オリンピックに皆で応援に行く日がやってくることを。

さて西武台バドミントン部は渦潮に似ています。強い流れの本流、脇の支流、海底の構造、そして太陽、月。いくつかの要素が絡み合って渦の上の船と人が回されています。あなたはどのれですか。私はいったいどれでしょう。渦の一つひとつがその学年であると考え、今年までで 19 個の渦を作ったこととなります。顧問は次々と渦を作り出す海流で、部員は船の客です。支援者は渦を作るもろもろの要素でしょうか。

いいえ、でもそんな大それた考えは間違っていると思います。西武台の一生はただ一つの渦に過ぎないでしょう。人の力は有限です。どんなに頑張っても人が海流や地球、ましてや太陽や月に例えられるべくはありません。私達はせいぜい数秒で消えてしまう渦の一つです。まだ今は大きな渦を作っている最中と言うところでしょうか。雄大な宇宙の営みから見たら 20 年はほんの一瞬。これからも続く西武台の歴史もほんの数秒に過ぎません。どんなに一生懸命やっても、人間のなせる事はせいぜいちっぽけな渦の一つになることです。それでも一生をかけて懸命に皆と共に一つの渦を作ろうと思います。体力は有限でも、心は無限の広がりを持っています。夢や希望や努力こそが渦を生み出す海流や太陽や月となることでしょう。心のパワーを一つにして、大きな渦を作りましょう。

---

## 夢は大きく、目標も大きく

—感謝の気持ちを忘れずに—

稲田 聡

私は現在 33 歳である。ジャイアンツの長島名誉監督の元の背番号と同じである。最近、年齢に対する意識が薄くなっているのに気付く。年齢を聞かれると 32 だか 33 だか自信なく返答してしまうことさえある。学生時代は、年齢によって学年が一つ上がり、18 歳で高校卒業（大学進学）、20 歳で飲酒解禁（イッパシに大人の仲間入り）、22 歳位で就職して自立など、年齢に応じてオプションのようにイベントがやってきた。だから年齢に対しての意識も比較的高かったのだと思う。しかし今は、自動的にやってくるイベントはほとんどない。だからこそ積極的に【目標】をもって生活していこうと思う。目標は……。とうぜんインターハイ優勝（日本一）である。〈日本一〉という言葉を経々しく使うつもりはないが、やはりは大きな目標だ。

来年、北京五輪が開催される。毎年遠征に行っている中国の偉倫体育学校の選手は、おそらく出

場するであろう。この部からもいつか五輪選手が生まれることを願っている。それはこの部にとって決して夢物語ではなく、一つの目標であると思う。

話は変わるが、誰もが知っている高橋尚子（愛称Qちゃん）は現在もう35歳である。未だに現役選手として本気で北京五輪を狙っている。アスリートとしては高齢の35歳である。凄いと思う。彼女は第二次ベビーブームの真っ只中、岐阜県岐阜市で生まれた。ちなみに当時の出生数は209万人程で現在の106万人に比べて約2倍の差がある。俗に言う「団塊ジュニア」である。彼女はその中でもずば抜けて強靱な心と負けん気を持っているのだと思う。（彼女と会ったことはないが・・・）。彼女はシドニー五輪（2000）を含む、国際大会で幾度となく優勝している。日本女子マラソン界として初めてのオリンピックの金メダルも手に入れた。そんな彼女の人間性や生き様がメディアを通して伝えられ、多くの人が感銘した。そして「世界のホームラン王」で有名な王貞治が30年前に始めて受賞した国民栄誉賞を受賞した。そんな高橋尚子が35歳になった今も、まだ自分の目標に向けて挑戦し続けている。その【目標】はオリンピック〈出場〉ではなく〈優勝〉である。かなり険しい道のりであると思うが、そんなQちゃんには是非とも頑張ってもらいたい。

初めて西武台千葉高校の体育館に足を踏み入れてからもう9年も経つ。そしてこの部は20歳を迎えた。部において歳を取ることはとても意味深いことだと思う。毎年、歳をとる傍らには、必ず部を巣立っていく選手達がいる。色々な思い出だけでなく、それぞれの願いや想いが毎年毎年「バトン」のように引き継がれている。「もっとしっかりやれ!!」「もっと強くなれ!!」という強い願いがその「バトン」にはこめられている。そして目には見えないが、礎となって選手たちの後押しをしてくれている。今の選手達は果たしてこのことを理解し、感謝しているのだろうか?・・・と不安になることがある。

この20年間で校名は「武陽学園」から「西武台千葉」にかわり、年号は「昭和」から「平成」へと変わった。子供の数もピーク時に比べ半分になり、学校教育も競争から共存が重視されつつある。「我慢」や「感謝」という考えさえも軽視されているように感じる。

だからこそ今、将来の目標を成し遂げるために、西武台千葉のバドミントン部の原点を振り返ってみたいと思う。20周年祝賀会で出会う方々に対して感謝の気持ちを忘れずに、多くの話を聞いてみたい。きっとその中にはとても大切だけど、今の我々が失いつつあるものが必ずあると思う。

